



闇の木

彼岸堂

よくよく考えたら、あの夜はやけに静かだったな。

深夜零時。

その日、私は無性に眠かった。

予定も何もない穏やかな週末。夜更かしをするのには最適で、その日の夜も今までしてきたようにするつもりだったが、どういうわけかあまりにも眠くて、本を開き続けることすらできないぐらいに意識が朦朧としていた。

深夜零時。

鈍くなった思考のまま時計を睨みつけるも、眠気に比例して視界がぼやけていてはっきり見えない。わかるのは深夜約零時。考えられるのも深夜零時ということだけ。もっと起きていたい。その欲求は確かに存在していた。が、肉体と精神の齟齬は激しく。やがてまどろみに全てが統一されていくその確信を得た。その瞬間。

突如インターホンが鳴った。

その若干古ぼけた電子音が、私の心臓を掴み取る。電流が走ったかのような覚醒。勢いよく身体を起こし、僅かに沈黙する。

深夜零時だぞ。

と、疑う思考がその時の私には欠如していた。「終電を逃がした友達が来たのだろう」という、あまりにも能天気な解釈をしてしまっていた。

何故覗き穴を覗かなかったのか。何故深夜零時なのか。何故前触れがなかったのか。考え出すと限が無い。とにかく、私は、無警戒に玄関を開いてしまったのだ。

そして、それと目が合ったのだ。

正確には、その目と思われる二つの緑色の光に。

黒い、得体の知れない大きなものが、夜をさらに黒く塗りつぶして私の家の、私のアパートの前に立っていた。大きい。家を出てすぐ見えるはずのまばらな街燈が見えない。それはつまり、視界は全てその身体に埋め尽くされているということだ。

呆然とした。立ち尽くしてしまったし、言葉も失った。きっと呼吸も忘れていたに違いない。

恐怖というよりはむしろ、ただただ驚いてしまっていたのだ。

目の前の闇の……闇色の何かの中で、二つだけ輝いている『目』は、よく見ると中心で小さな渦ができていて、ゆっくりと動いていた。私を見つめている。それがわかる。

闇が迫ってくる気配がする。目を凝らすと、私の前に一層濃い闇が音も無く近づいている。恐らくこれは目の前の存在の『腕』にあたるのだろう、と直感した。

『腕』が私の前で蠢き、そして。ありがちな話ではあるが……そこで意識が一度途絶えた。

次に目覚めたとき、時刻は相変わらず深夜零時だった。「あれは夢か」と思ったその時に、自分が黒い植木鉢を抱えて寝ていることに気づいた。そして、あれが夢ではなかったとわかってしまったのだ。

「それは、どう考えても夢でしょう」

そう返してから、彼女は砂糖たっぷりのコーヒーを口に含む。

私と真逆の飲み方で、見ているだけで口の中が甘くなる。

「ホラー映画を見すぎたんじゃない？」

カップを受け皿に置く音が、少しだけカフェに響いた。客がいないせいでこんな音まで大げさになる。

彼女のこの返しは、私には良心的に感じられた。下手に話を合わせないところが丁度いい。彼女がそう思うのならそういうことにしよう、と諦めがつきやすいのだ。もともと気まぐれで話したことだし、端から信用してもらおうなんて思っていない。変に乗っかられたりしたらむしろ困っていた。お茶請けのゴシップと同程度のものとして出したのだから。言ってみれば、ただのきっかけだ。

私と彼女は、いつだって私から話を始める。今日の最初の話題に利用させてもらっただけだ。

「で、それで終わったの？」

彼女が質問してくる。どう見てもさっきより表情が生き生きしている。頷いて肯定してみせると彼女は「はー」と多義的な声を発した。

「なんだか拍子抜けね。でも、何と言うか『らしい』わ」

コーヒーを飲んでから頷いてみせる。順序が逆の方が良かったな、と思いつつ。

「で、まだ他に何か聞かせてくれるんでしょう？」

今度は頷いてからちゃんとコーヒーを飲んだ。

帰宅し、電気をつけることなく、カーテンで陽光を遮断したりリビングへと入る。

『闇の木』はまた成長していた。

暗い室内で、ぼんやりと薄紫の輝きを宿しながら、今日も黒い植木鉢を基にして佇んでいる。まだ30cmほどと言った所だが、最初はそもそも芽が出てすらいなかった。そこからの成長を考えれば早すぎるぐらいだろう。

枝も無く幹に直接『薄紫に輝く何か』が付着しているだけなので、正直木と言うには怪しいのだが、それでも木という表現がしっくりする矛盾があった。

『闇の木』。

私はこの妖しい物体をそう呼んでいる。こいつは、あの夜の出来事が夢ではなかったのを示す何よりの証拠だ。私は、あの夜に出合った黒い何かからこれを託されたのだ。

その理由も、この物体の正体も、当然わからない。

しかし興味はある。果たしてこれが何か。何故私なのか。正体不明からなる恐怖より、正体不明が導く好奇が勝っていた。

『闇の木』の輝きは、月光よりも眩く、陽光よりも幽かで、気味悪く、けれど美しい。部屋がこの薄紫の輝きで満ちていると、ここではないどこか遠くの世界の波一つない海に浸かっているような心地よい気分になる。私の肌が薄紫に染まり、髪も、コーヒーも、全てに薄い膜がかかり、やがてそれが体内を走る血にも浸透していく感覚がある。

こんな中で本を読むのが、今では一番の楽しみとなっている。

着々と成長しているこの『闇の木』が最終的に何をもたらすのか。個人の終焉か、はたまた世界の永眠か。それとも、しょうもない奇跡か。膨れ上がる想像と、それに伴う静謐な時間を、できる限り味わうつもりだ。

ふと、携帯電話が震える。彼女からの電話だ。本を閉じて応答すると、彼女の気だるそうな声が聞こえてくる。

「今、暇？」

電話越しで私達は違う世界にいるのか、何て想像すると三文批評家が好きそうな文学的境界を幻視してしまう。

暇だと告げると、彼女は「お風呂沸くまで話つきあってよ」と言ってくる。いつものことなので、特に面倒とも思わず付き合うことにした。

会話しながら、輝きの前に手を翳して振ってみたりすると、何だか眠くなってくる。

やがて向こうのお風呂が沸いて通話を切ると、極自然に私の身体は眠気を受け入れた。
このまましばらく、仮眠を取るとしよう。

気がつくとは私は、真っ黒な海と真っ黒な雲海に挟まれた世界を、翼の生えたオオサンショウウオのような生物の背に乗って、汚れた空気を切り裂きつつ進んでいた。

遠くの方で時折、雷雲が咆哮する。その輝きのみが僅かに世界を照らしている。

大気にはガソリンと血が混ざったような匂いがこびり付いている。

陸地らしきものは見えない。

.....実にありふれた世界の終わりだった。

しばらく代わり映えのない終焉が続くと、唐突に私の身体がオオサンショウウオから引き離される。まるで目に見えない壁に私だけ阻まれたかのように。

私のことなど気にせず進むオオサンショウウオ。取り残された私はそのまま黒い海に落ちる。悲鳴をあげる暇もなく、大きな音を鳴らして、入水する。

意識がそこで途絶える。

「これまた露骨な悪夢だなあ」

彼女が愛想笑いを浮かべながら言った。砂糖たっぷりのコーヒーがいつも通り口へ運ばれる。対する私もいつも通り彼女と真逆の飲み方をしている。

「オオサンショウウオっていう部分は悪くないけどね」

両生類が好きなのかと問うと「カエルはダメ」と返された。オオサンショウウオを特別視する理由は果たしてなんなのだろうか。

「ねえ、最近そっちの家遊びに行っていないね」

くるくるとコーヒーをスプーンでかき混ぜながら彼女が言う。

「今度行っていいかな」

勿論、私は断った。

「えー」

不満そうにする彼女のその表情は、きっと何も知らない人が見れば可愛く思うのだろう。

「最近付き合い悪いなあ」

今回は代わりに私が彼女の家泊りに行くことで勘弁してもらった。それでも彼女は、どこか納得がいかない表情を最後までしていたが。

『闇の木』がそろそろ天井に届きそうな程に成長していた。

冬が近づき、日が落ちるのが早くなるのにつれて、成長の度合いが顕著になっているような気がする。

『闇の木』の下で食べる薄紫に染まった夕食は、冥界の食物を連想させる。一口食む度に、わざわざ黄泉まで迎えに来てくれた最愛の夫にすら恐れられるような身体へと、私も変わっているのだろうか。

食べ終えて食器を水に浸けた後、ベッドの枕元に放り投げておいたCDプレーヤーを手にする。私が所有するただ一枚のCDをただひたすら流し続ける円盤奴隷。イヤホンを耳につけようとよそ見しながら押した再生ボタンは、少しかたい。

やがて流れ始めるジムノペディ第一番。

幽世の幻視が始まる。

心をからっぽにすることは、想像以上に簡単だった。

目蓋の裏に、熱のない世界を信じて深呼吸をする。

深い闇に馴染む和音。

膝を抱え、身体の中で渦巻くものを一つに留めようとする。

この狭い宇宙の中で小さな星になるのだ、と呟く。

何もなくなった私の中を、その声は波紋として、不協和音として、歪な色のまま薄く、かつ圧倒的に染めていく。

実に興奮した。それは静かな興奮だ。

私の足音が大げさに響いている。かつかつかつと、心拍音にあわせて反響している。

右手に持つ名前も知らない短銃が、キラキラと玩具のように輝いている。

私は知っている。この中にはあの悪魔を打ち倒す銀の弾丸が一つだけ込められていることを。

長い長いトンネル。終わりは見えない。けれど走るしかない。あの悪魔は音を頼りに私を襲うのだから。いわばこれは罠であり、そして目印だ。奴の爪が私を切り裂こうと、わずかに肌に触れたその瞬間を狙い、痛みの根元に向けてこの銃を放つ。触覚が極限まで鋭敏になった今の私なら可能なはずだ。

と、そこで脚に何かが引っかかった。死んだ視界ではそれが何かなど当然わからない。棒か石か。問題なのは、今正に私が地面とキスをしようとしているその事実だ。咄嗟に手を前に出して顔面が地面と激突するのを防ぐ。

ばあん。

轟音で両耳に痛みが走る。どうやら倒れたときについ引き金をひいてしまったようだ。硝煙の甘ったるい、パイナップルのような香りがする。

反響が途絶え、静寂が訪れる。

終わった。私はここで死ぬ。そう認識した瞬間、全身からどっと汗が吹き出る。どろどろとあふれ出る汗が、じわりじわりと広がっていく。固い地面を満たしていく。

ついにはトンネルが汗で満たされ。私は自らが流した汗の海で息ができなくなり。

私の意識はそのまま途絶えた。

「パイナップル缶って、昔ちょっとした贅沢だったんだ」

珍しく彼女から話始めたので、コーヒーを口に含むタイミングを逃がしてしまった。

「私が風邪ひいて寝込んだりすると、お父さんがいつも桃とパイナップルの缶詰を買ってきたんだよね。私の家ではそんな機会では果物の缶詰って食べることなくてさ」

私の家ではどうだったろうか。風邪をひいたとき、母さんがいつも熱い鍋焼きうどんを作ってくれたような気がする。

「あのシロップの甘さと、とげとげしいパイナップルの味が、すっごく好きだった。冷えた缶から直接シロップ飲むのが美味かったなあ」

彼女はどうやら昔から甘党だったようだ。思い出を語る彼女の瞳の奥にある円環がパイナップルのそれへと変わっていくのが見える。

「ねえ、風邪引いてよ」

彼女が端的に、唐突に、意味不明なことを言う。

「そしたら私が缶詰持ってきてあげるから。一緒に食べようよ」

バカらしいと私が笑うと、彼女は少しだけむくれた。割と本気だったようだ。私としては、彼女に風邪を映すのが嫌だという意味だったのだが。

玄関を開け、一步踏み入ると、柔らかい感触と共にみしりと根を踏んだ音が響く。

『闇の木』そのものと化した私の部屋は、容易く私を胎の中へと導く。

かつて植木鉢が置かれていた場所、リビングの中央にあったテーブルには、薄紫の輝きを放つ珊瑚のようなものが存在しており、それが鈴の音のような澄んだ音を時折響かせている。

鞆を置いて座ろうとすると、細長いものがいくつも床から伸びてきて私の身体を支える。触れた箇所から暖かさが広がってくる。その温もりが自然と私を眠りに誘う。

珊瑚の鈴の音が、和音へと変わった。

いくつもの和音が重なり合い。

やがて一つの音の層を残し静謐なものへと変わり果てる。

目の前にスポットライトに照らされたベルトコンベアが走っている。丁度垂直の位置から私はそれを見ている。周りは暗闇しかない。ごうんごうんと音がしている。物がベルトコンベアの上を流れてくる気配がない。

やがて左の方、ベルトコンベアの始まりの方からきいきいと甲高い泣き声が聞こえ始めた。猿だ。正座した猿が、ベルトコンベアに流されながら、私の方を向いてきいきいと鳴き続けている。明らかに怒りを伴っているのだが、猿が正座を崩すことはない。

猿は一匹だけではない。次々と正座した猿が流れてくる。皆一様に私に対して攻撃的な感情をあらわにしている。猿達は右側のコンベアの果て、私の視界の果てに行くまで絶えず鳴き続けている。奇声合唱が雑音へ墮落するまで時間はかからなかった。

ふと。右手に、何かを握った感触がする。見るとそこには刃が蒼く輝いているバタフライナイフが存在していた。

今夜の死の象徴はこれか。

私がその柄を力強く握ると、刀身の蒼が鱗粉のように散って煌く。

さて私が裂くべきは自らの喉か猿どもの頭蓋か。

解法をあと少しで閃くときの独特のむず痒さが右手から全身へ広がっていく。

「まだ死ぬ気なの」

はっとした。異常な音がした。意思と目的のある声が聞こえた。この世界に置いてありえない秩序を感じた。

見るとベルトコンベアの猿どもはとっくに消えていて。

その代わりに正座したxxが、私の前を横切っていく。

異物だった。癌だった。天蓋の割れる音がした。ぐにゃぐにゃと地面が揺れていた。xxの両目が、浮き出てくる。眼球だけが意志を持って、ずるりと視神経を引連れて、私を見抜いている。

秩序と混沌の境界が取り払われ喰らいあい起きる中で、私の精神と肉体は凄まじい摩擦を受け、やがてxxの視線に耐えることができず、自ら喉を引きちぎるように悲鳴を上げ、明確な脱出を願った。

しばらくして私の意識が途絶えた。

その日彼女は、カフェに来なかった。

私一人だけの時間が流れている。お客がいないことを強く意識せざるを得ない。私だけが、今の場所でコーヒーを飲んでいる。

恐ろしく退屈だった。

おもむろに私は、カップ半分の量しかないコーヒーに砂糖をたっぷりを入れる。そしてろくにかき混ぜもせず一気に口の中に含み喉へ流し込んだ。

吐き出したくなるような甘みで、退屈の二文字を吐き出そうとした。

無駄な努力だった。

携帯電話の画面と空になったカップを目で往復するだけの、音の無い時間が過ぎていった。

少しだけ、躊躇いがあった。闇の海に身をゆだねる恐怖を初めて感じた。

しかし私は、行かなければならない。

行かなければならなかったのだ。

太陽が沈み、この星の半分が薄闇の羊水へ浸かっていくその時にあわせて。

恋焦がれていた静かな場所へと行かなければならない。

静寂は幸福である。静寂を基盤とする世界は、慈愛に満ちている。

泣きながら生まれたあの日から私達は静寂を置いてけぼりにした。静けさが恐怖だと感じるようになった。

だがそれは暗示だ。

静寂を基盤とする会話は、言葉の波が際立って感じられ、そのおかげで愛おしく思える。

静寂を基盤とする関係は、激情の痛みを強く憎み、悲哀の儚さに触れることができる。

静寂を基盤とする命は、世の全てを感じ、受け取り、流し、絡み、薄く一つに、溶けていく。

静寂を基盤とする回帰。

この不安と躊躇すらも全て一つとするような、静かな場所を。

それだけを、私は欲している。

コーヒーのブラックは、好物の中に紛れ込む異物だった。

砂糖だらけのコーヒーはこんなにも美味しいのに、ブラックだけは許せない。飲むのを想像しただけで嫌になる。不快だ。

でも、存在する権利は認めてやらないでもない。

親友が美味しそうにそれを飲むから、仕方なく私はこの世界でブラックコーヒーが存在することを許している。

同じようなことを彼女も考えているのだろうか。

私が砂糖たっぷりのコーヒーが好きなのを彼女は複雑な気持ちで見ているのだろうか。

「最近また変な夢を見る」

彼女が口を開いた。

「死ぬ夢なんだけど。私が」

ぽつぽつと、私の目と私のカップを交互に見ながら彼女は話す。

「それがとても不気味で楽しい」

へえ、と私が漏らすと彼女はコーヒーを飲み始めた。タイミングを計ってたのだろう。

「オオサンショウウオ」

突然、両生類の名前を口にする彼女の表情がシュールで、思わず笑いそうになる。

「多分オオサンショウウオだったと思う。両生類の。その背中に乗った。オオサンショウウオって言っても大きいよ。竜に乗ってる感じだった。翼も生えてる。で、その背中に乗っていかにもな感じの世界の終わりをぶらぶら見て回った」

いかにもな感じの世界の終わりとは果たしてどういうものなのか。彼女の一般化ははっきり言って一般化になっていないのが常だ。

「で、途中でいきなり何かに引っかかってオオサンショウウオから落とされた。何か見えない壁に私だけ引っかかった感じで。オオサンショウウオはどんどん進んでいくけど私はひゆるひゆる落下していく。それで真っ黒な海へどぼん。死亡」

なるほど。彼女の世界の終わりには黒い海が欠かせないらしい。

私が正直な感想を漏らすと、彼女は黙り込んでしまった。とりあえずオオサンショウウオのシュールさだけ褒めてみる。

「両生類、好きなの？」

そうきたか。これは意外な返しだ。正直好きでも嫌いでもないのととりあえず何となく思いついたヤドクガエルを基にカエル嫌いという設定にしておいた。

私の発言に対し彼女はなにやら納得したような表情をしている。それが実に素直で、邪気がない。

そう言えば最近彼女が笑う所を見ていないな。そう思った次にはそもそも彼女の家に最近遊びに行っていないことを思い出した。

彼女の家。生活観が希薄で、テーブル上に鎮座するCDプレーヤーがやたらと存在感のある家。静か過ぎて寂しくないのか不安になる家。

私がそれとなく遊びに言っていか切り出すと彼女は「ごめん。今無理」と短く返した。

それがあまりにも素っ気無いので思い切り不満を露にすると、彼女はほんの少し困ったような表情を見せた。彼女の貴重な部分だ。私だけが知っている特別。

「代わりに私がそっちの家に行くよ」

全然代わりになっていないけれど、とりあえずこの場はそれで許すことにした。

私はオオサンショウウオだった。翼の生えたオオサンショウウオだったのだ。

人間のときと視界が違う。しかしそれも徐々に慣れてきた。

行けども行けども、世界は真っ暗である。眼下で黒い海が荒れ、空は雷雲がごろごろとお腹をくだしたような音を響かせている。同じ光景、同じ雑音が続いている。実につまらない。

そんな中、前方で雲から何かが落ちてくるのが見えた。

xxだ。

xxが、頭を下にして黒い海に落ちようとしている。流星の様に、躊躇うことなく、ひゆるひゆると。

私は翼をはためかせ、慌ててxxを広い背中で受け止めた。xxは私の背中の上で大人しくなった。

どうしたものかと思案する。

とりあえず陸にxxを降ろすと決め、面白みのない世界を再び漂う。

しばらくして、背中に違和感を感じた。

xxが起きたのだろうか。そう思った瞬間には、xxが私の背から黒い海に飛び降りていた。まるで引き寄せられるように。自らの足で彼女は私の背から離別した。

私はxxを再び背で拾おうとするが、xxの落下はどんどん速くなり、私を逃れあっという間に海へ落ちていった。追いかけて私も荒海に飛び込んだ。

海の中は、薄紫の輝きに満ちていた。それらは海底から蒲公英の種のようにふわりと浮き上がってくる輝きであり、私にはとても不気味なものに思えた。水面を隔ててこんなにも違う世界が存在しているのは、恐怖でしかない。

xxは目を閉じたまま、輝きの方へ沈んでいく。

もがいてそれを追いかけるも、一向に距離が縮まらない。一切の音を排除した海中は、音を発しうる私を異物として除こうとしている。

行かせてはならない。本能の警告に従い、私は叫ぼうとした。

しかしそこで意識は途絶えた。

どれほど経ってからだろうか。

彼女を見るたび、息がつまるようになった。

彼女は認識しているのだろうか。認知しているのだろうか。私が何度も何度も、薄紫の輝きから彼女を引きずり出そうと叫んでいたことを。

いいやきっと知らないのだろう。だって今目の前で自分のカップをじっと見つめる彼女は、いつもと何も変わらない。その瞳は相変わらずぐるぐると小さな黒い闇を渦巻かせている。

私は、破戒を試みることにした。

彼女にそれとなく、パイナップルの話を持ち出した。硝煙の匂いを私も嗅いでいたから、もしかしたらと思口にした。私はあのとき彼女を追いかけていたのだ。もしかして彼女もそれを知っていたのではないだろうか。

しかし彼女は、飲もうとしたコーヒーを受け皿に置きなおしただけで、ただただ私の話を無言で聞いていた。ぐるぐると廻る闇色の瞳は一切の動揺を見せない。

バカらしくなった。やけくそになって、つい無茶苦茶なことを彼女に言った。私の願望をありのままに話した。少しだけ、ほんのちょっとだけ、あの夢の話をしようという下心を含んで私は道化になった。

「バカらしい」

そう返す彼女は、笑って言ったつもりなのだろうか。決定的な何かを私達の間を感じた瞬間だった。

そして彼女は次の日から姿を消した。

幾百の悪夢の中で幾百もの死を貪るxx。私はただそれを見つめる。見つめている。

そんな意味のわからない繰り返しの中で思うことがある。それは昔のことだ。そして出会いのことで、確かに存在していた事実。

静かな場所に行きたい。

それがxxの口癖だった。

普通の、どこにでもいるはずの彼女の、たった一つの欠損。ごく普通の家族に囲まれ、ごく普通の友人を持つ、何も珍しくない彼女の中にある違和感。

時に病的な熱を伴って発せられるその口癖は、私にとっては逆に魅力となっていた。

xxはとてもロマンチストだったし、臆面もなく空想を話してくれる良い意味での恥知らずだった。一緒にいるのがとにかく楽しかった。彼女が発する静かな場所は、場所であって場所でないのだろうと意味不明な想像をするのが止められなかった。快樂だったのだ。

だからといってそれが、じわりと侵食することなど、予想できただろうか。こんなわけのわからない何かを形成してしまうなんてことが、ありえたのか。

まだ私は何が現実で何が幻実なのかの線引きができていない。夢現の狭間を漂っている。

始まりと終わりが曖昧なまま、どこかに何かを求めて、朦朧と。

そうして、どれほど経ったというのか。

どういふわけか、突然私の前にナイフを持った彼女が現れた。異様に目を見開いて、何か呟きながら私を見ている。ナイフを持つ手が振るえ、怯えているのがわかる。

xxのこんな姿を、私は初めて見た。

ナイフを持つ彼女を見ながら、私は何かに急かされるように思っていたことを口にした。

ぶつん、とその瞬間に音が鳴り。私の意識は途絶えた。

深夜零時。

弱々しく点滅する薄紫の輝きを見つめながら、私は横たわっていた。

体内時計か何かわからないが、深夜零時ということだけがやたらと頭の中を駆け巡っている。闇はもう無い。

枯れ果てた闇が、ぱりぱりと乾いた音を鳴らしながら自壊し、欠片となり、霧散し、徐々にただ、灯がないだけの暗い部屋へと戻っていく。

この世ならざる闇がこの世の闇にその夜の色を返そうとしているのだ。

深夜零時。

静寂が失われていく様を見つめる私。

そんな私を見下ろす、『目』。

何か語りかけているのだろうか。二つの緑色の輝きは、薄く細く、私を見下ろしている。

そこにはあの時と全く違う何かが確かに宿っていた。

私は、一言礼が言いたかった。

恐らく、いや、確実に忘れていくだろう私のあの時間。けれどあれは確かに存在した事実であり、私の一生に残る大切に、とても静かな輝きだった。私が求めていた静けさが何であるかを私は知ることができた。

そしてそれはこの先永久に手に入らないということも理解できたのだ。

だから礼が言いたかった。

教えてくれて、味あわせてくれて、ありがとうと。

弛緩した言語野を覚醒させようともがくも、まどろみは歩みを止めることなく。

何も言えないまま、強い力によって。

私は深い眠りに落ちた。

砂糖たっぷりのコーヒーとブラックコーヒーがテーブルに置かれ、いつもの時間が始まる。

お決まりの、彼女からの話が始まる。

「よくよく考えたら、あの夜はやけに静かだったな」

コーヒーを時折口に含みながら、私は彼女の話聞く。

時間は確かに流れている。

コーヒーは冷めない。

彼女の瞳は、いつもの色のままだ。

やがて話し終える彼女に対し、私はこう返す。

「それは、どう考えても夢でしょう」